

日本をふくむ東アジアの伝統音楽の世界には、さまざまな種類の、書かれた楽譜が存在するが、現代の視点からみると、多くの楽譜は「不完全」なものである。

「不完全」なものを前にして、音楽学者は「復元」を目指してきた。楽譜というテキストそのものに焦点をあて、楽器や声を持っている物理的特性や限界を考慮にいれながら、楽譜にみられる記号同士の論理的整合性や一貫性をさぐる。それに平行して、当時の演奏が行われた場所、機会、人、人数、参加者などの実態を、文学や日記などの記録からさぐる。つまり、コンテキストを参照することによって、楽譜というテキストの解釈あるいは「復元」を、より妥当性の高いものにするのである。

このような復元研究に加えて、もうひとつの研究の視点がある。それは、伝承における楽譜の機能や役割をさぐる研究である。すなわち、楽譜が、伝承の現場でどのように使われ、どのように見なされるかを調べる研究である。

本年度は、民俗芸能の現場において、記されたテキスト（記譜）が伝承を助け、あるいは邪魔し、伝承を活性化させる様子を観察することができた。研究代表者が、以前から継続的に研究対象としている民俗芸能のひとつに、奈良県の題目立がある。例年、10月12日に行われる本番にくわえて、本年度は、練習の調査を集中的に行うことができた。

面白かったことを、ひとつだけ紹介したい。私はかつて保存会からの依頼をうけて、練習に用いるための歌詞のテキスト校訂を行った。校訂作業の中心のひとつは、句と句の間に、実際の音声上の句の切れ目にあわせて、きちんと対応した読点をつける作業であった。それは、学習者が迷わないような練習用テキストが欲しいという、保存会の声に応えた作業だったのである。

こうして、より「完全」なテキストが完成した。しかし、である。練習の現場では、その「完全」なはずの練習用テキストの読点が、いくつかの問題を引き起こしてしまった。つまり、読点を「正しく」打ったことによって、歌い手たちに本来与えられていた、バリエーションを歌う可能性が奪われることになってしまったのである。「完全」を期したはずの読点付きテキストが、より「不完全」なものとして伝承者の前に立ち現れてしまった瞬間であった。

次年度も引き続き、記譜の使用に伴う様々な問題を考えていきたい。

（藤田 隆則）

